

一 次の各文の——をつけた漢字の読みがなを書け。

- (1) 教室の床を磨いて、新入生を迎える。
- (2) 心を込めて栽培したトマトが赤く色づく。
- (3) 地域を循環するバスが満開の桜並木を走る。
- (4) 初夏の風に吹かれて、木々の青葉が揺れる。
- (5) 日ごろからの鍛錬の成果が試合で発揮される。

二 次の各文の——をつけたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 体力測定で、ハンドボールをナげる。
- (2) 美しい紅葉を求めて、野山をタンシヨウする。
- (3) 新校舎を建設するためのザイゲンが確保される。
- (4) 前夜からフった雪で、窓の外は一面の銀世界だ。
- (5) 主人公が旧友と感動の再会をする場面はアツカンだ。

三 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印のついてい
る言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

家の中はしんとしている。父も母も出かけているのだろうか。わたしは起き上がり、冷たい水を飲むために部屋を出た。そういえば、今度の日曜も自転車の練習よ、と母が言っていたことを思い出した。五十歳を過ぎた母が、自転車に乗れるようになったと言いついたのは、この街に引っ越してきてからだだった。その頃、我が家ではいろいろなことが大きく変わろうとしていた。長年勤めた会社を辞めて独立した父が、この街で新しい事業を始めたのだ。それまで住

んでいた家売って事業資金に充て、わたしたちは父の会社の近くに小さな部屋を借りて住むことになった。

住み慣れた土地を離れ、生まれてから一度も行ったことのない場所に住むというのは、なんと心細い気持ちなのだろう。引っ越す部屋を最終的に決めるといふ日、両親と弟と四人で、初めてこの街に下り立った。電車が大きな川を渡ると、窓の外の風景は突然なじみのないものになった。⁽¹⁾新しくできた駅の、まだコンクリートの色が白いプラットホームに風が吹き抜けていった。

引っ越した翌日から、目まぐるしい日々が始まった。母は父を助けて経理の仕事をするため、夜間の経理学校に通いながら、昼間は会社とともに働いた。朝早くから夜遅くまで、ふたりは働き通しだった。弟はすでに独立して一人暮らしをし、わたしも深夜まで残業して帰らない。家族の姿を家で目にする機会は急速に減り、両親と話をする時間もほとんどなくなっていた。

ときおり交わす朝食の会話の中で、母の通う経理学校や父の会社が、家から自転車で行かれる距離であるということやなんとなく聞かされていた。自転車があればねえと、母は言うともなしによく呟いた。そしてある日、ついに自転車を買ったと告げられたのである。「ええっ、もう?」

わたしは驚いて言った。

「だって、練習を始めなくちゃ。」

「ちよっと待ってよ。危ないわよ。やめたほうがいいんじゃない。バスだってあるでしょう?」

「バスは遠いもの。」

乗ってしまえば、バスのほうがずっと早い。

「そりゃそうだけど、パパと一緒にいきたいのよ、自転車二台、連なって。」

母は嬉しそうだっ

道端の雑草にうつすらと土埃が積もっているようなこの街の中で、家のすぐ近くにある細長い公園だけは唯一、心和む空間だった。公園といっても、*グリーンベルトに近いようなものである。服を着替えると、わたしは部屋の窓を大きく開け放ち、公園の方を眺めた。葉を青々と茂らせているあの木の下あたりで、母は父に助けられながら細い道を行ったり来たりして自転車練習しているはずだ。

「いいか、まだだぞ、しっかり前を向いて！」

小学校三年の夏休み、家の近くの公園で自転車を練習した。父の声が背中から飛んでくる。荷台をしっかりとその両手で支えられて、自転車は辛うじて立っていた。

(2) ギユツとハンドルを握り締め、グイと前を見つめた。よし、いまだっ。掛け声とともに強くペダルを踏み込んだ。ざざと父の運動靴が土を蹴る音がする。よろよろとおぼつかない動きで、自転車は前に進み始めた。

怖がらないで、もつと漕いでスピードを出せつ。ダメダメ、手の力を抜かないで。そう、大丈夫、押さえているからな、転ばないからな。そうだそうだ、いいぞ、頑張れ。

必死でペダルを踏んだ。
手を放さないでっ、絶対放さないでよつ。

大声で叫びながら百メートルほど先のイチヨウの木に向かって突進する。どうにかこうにか木の下まで行き着いても、今度は方向転換がまた大変だ。ペダルが足から離れそうになり、そのたびにハンドルに力が入って右へ左へぐるんぐるんと曲がりそうになる。怖い。腕の力を抜いてっ。緊張した背中に父の声がかかる。

ようし、思いきって力を抜くぞ。

するとペダルは一気に早く回転するような気がした。そして次の瞬間、ふわりと軽くなった。うわあ、どんどん行く、どんどん行く、

お父さーん。

振り返ろうとして、はっと気がついた。いま一瞬、目の端に飛び込んできたあの人影はなに？ まさか……。自転車は再びイチヨウに差し掛かった。木の陰に、手を腰に当てニコニコしながら立っている人がいる。お父さんだ、手を放したんだ！

そう思った瞬間、わたしは自転車ごと横倒しになって地面に滑り込んだ。

したたかに股を打って泣きじゃくりながら、乗れたんだよ、もも子ひとりで走れたんだよ、と言う父の声を聞いた。

(3) 「わたし、乗れたの……？」

涙の下から恐る恐る問うと、そうだよ、もう支えなしで乗れるんだよ、と答える笑顔が目の前にあった。

後ろで支えてもらっているときの、振り返りたくてもそうしてはいけないような、ちよつと心細いような気持ち、それでいて温かい安心感に包まれたような気持ち。母もいま、臍脂色の真新しい自転車がまたがって、緊張に顔を紅潮させていることだろう。明日は自転車で出勤できるだろうか。

高齢で独立した父の仕事がいまどういう状態にあって、なにか大変なのかということに、わたしはあまり関心が向かなかった。新しい会社ですら、行ってみようという気持ちにならない。同じ屋根の下で暮らしているも、わたしも働いている一人前の人間なのだという気があつた。いつもどこかで気になりながら、日々は自分の仕事の刺激に押し流されるようにして過ぎて行き、親という存在に思いを馳せることが面倒になっていた。わたしは、家族に背中しか見せなくなっていた。

父は自分の会社を持てたことを、ことのほか喜んでるように思えた。だが、母が夜中にふと目覚めると、布団の上に座ってひとり煙草を吸っている姿がよくあつたという。闇の中で、父はなにを思

つていたのだろうか。暗い塊のように、じっと動かぬその背中を見つめながら、母はどんな気持ちだったのか。わたしたちは互いの背中をただ見守ることで精一杯だった。

しかしそうであったとしても、背中を支えてくれる手の感触を、わたしはどこかで感じていた。倒れぬように、後ろからしつかり支えられ、グイと力強く自転車が押し出される。自分一人で意気揚々とペダルを漕いだつもりでも、実は見えない家族の手で、外の世界に押し出されていたのだろう。

次の日、両親は朝早く会社に向かった。母は自転車で自分で作ったコットンのパンツに、濃いピンクの*ペイズリー柄のオーバーブラウスを着て準備万端だった。父は薄茶色の作業用ジャンパーだ。勤め人だったときに銀座の*テイラーであつらえた、艶やかな布地のスーツは、もうほとんど手を通されることがなかった。が、そのジャンパーは父に穏やかに似合っていた。

(4) わたしは窓から首を突き出して下の道路を見つめた。やがて自転車を連ねた二人が玄関から出てきた。母が呼吸を整えてぐっとペダルを踏み込んだ。静かに臍脂色が動き出す。それを待って父の古びた黒が発進した。早朝の澄んだ陽射しの中に、二人の背中はゆっくり並んで遠ざかっていった。

〔注〕 グリーンベルト——緑道。細長い緑地帯。
ペイズリー——曲線模様的一种。
(光野 桃「背中」による)

テイラー——主に紳士服などの洋服屋、仕立屋。

〔問1〕 (1) 新しくできた駅の、まだコンクリートの色が白いプラトトホームに風が吹き抜けていった。とあるが、この表現から読み取れる「わたし」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 新しく仕事を始めた父のことをまだこれといった魅力もない

駅の印象と重ねて、協力する意欲もわかない様子。
イ 家族に起きている変化に自分が関係してこなかったことを未完成の駅の印象と重ねて、どこからかわるべきか悩んでいる様子。

ウ これまで勤めていた会社を父が辞めてしまったことを何もない殺風景な駅の印象と重ねて、納得できない様子。

エ 住み慣れない土地でこれから始まる生活を人気がない寂しい駅の印象と重ねて、漠然とした不安を感じている様子。

〔問2〕 (2) ギュッとハンドルを握り締め、グイと前を見つめた。よし、いまだつ。掛け声とともに強くペダルを踏み込んだ。ざざつと父の運動靴が土を蹴る音がする。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 父の熱心な指導を受けながらも上達できないでいる「わたし」とそのことに対していらだつ父の姿を、誇張して印象的に表現している。

イ 緊張して練習に取り組む「わたし」と気合いを入れて教える父の動きをすばやくとらえて描くことで、生き生きと躍動的に表現している。

ウ 熱心に努力する「わたし」と「わたし」に振り回されながらも粘り強く教えている父の姿を、様々な角度から写實的に表現している。

エ 自転車を練習し続ける「わたし」とその「わたし」をほほえましく感じ始めた父の様子を、時間の経過とともに客観的に表現している。

〔問3〕 (3) 「わたし、乗れたの……う」涙の下から恐る恐る問うと、そうだよ、もう支えなしで乗れるんだよ、と答える笑顔が目の前にあった。とあるが、この表現から読み取れる「わたし」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 本当にひとりで乗れたのかを父に確かめずにいられなかったが、父のやさしい表情からひとりで乗れたことを実感して喜ぶ気持ち。

イ 手を放さないでとあれだけ頼んでおいたにもかかわらず、父が手を放したことを不満に思うとともにその理由を知りたいと思う気持ち。

ウ 実際にひとりで乗れたわけではないのに、泣いている自分を励ますために父はひとりで乗れたと言っているのではないかと疑う気持ち。

エ 思わず泣いてしまったがいつまでも泣いてはいけないう思ひ直し、父に話しかけることよって痛みをまぎらそうという気持ち。

〔問4〕 (4) わたしは窓から首を突き出して下の道路を見つめた。とあるが、「わたし」が「窓から首を突き出して下の道路を見つめた」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 父や母に冷たくしてきたことに気付いたものの、やはり前向きに生きる二人を見送ることくらいしか自分にはできないと思つたから。

イ 闇の中で何か物思いにふけていることがあると母から聞いた父のことが気になり、ときには出かけていく姿を見てみようと思つたから。

ウ 見慣れていたスーツとは違う作業用ジャンパーを着た父の姿と母の自転車通勤用の服装に興味があつて、一目見たいと思つたから。

エ 父と母が自転車を連ねて出勤するのを見送ることで、母が自転車に乗れるようになったことを自分の目で確かめたいと思つたから。

〔問5〕 この文章では、繰り返し「背中」という言葉が使われている

るが、「背中」という言葉に対する「わたし」の思いを四十字以内でまとめて書け。なお、や。などもそれぞれ字数に数えよ。

四

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

「書は美術ならず」という説に対して、東京美術学校(現・東京芸術大学)をつくった岡倉天心は、「書は美術ならずの論を読む」と題して、書は文字の大小、配列、形を工夫するのだから美術であると反論しました。これが現在のごく普通の書の理解だと思われま

す。(第一段)

文字には、「大」の字の右上に点を打つと「犬」、下に点を打つと「太」というような規範があり、その規範に従って字を書きます。

ある人は点を遠く打ち、またある人は横画を長く書くというよう

個人的な癖もあります。ここに書が一つ一つ異なった顔立ちをもつ

根拠があり、この個人的な作者の書き癖の代わりに、美的工夫を

書に忍ばせることもでき、そこに書的美が生まれる、という考えが

現在の最も一般的な考え方でしょう。(第二段)

「美的工夫」というと、歴史的な規範に沿った表現がよいという考

え、作者の企てに従って、規範からはみ出し歪める方がよいという

考え、あるいは、規範に沿ったり、作者が＊恣意的に歪めるよりも

日常の自然な書きぶりがよい、という考えが出てきます。現在の書

は、この三者のいずれかの立場に立って制作されているとも考えら

れます。(第三段)

(1) しかし、この「規範+美的工夫」という考えには落とし穴があります。もしも文字が規範に従って書くだけのものであるなら、いつまでも規範に従って書かれ続けますから、文字が誕生した時からその姿は変わるはずがありません。しかし実際には文字は歴史的に

どんどんその姿を変えてきました。この事実を考慮に入れると、

「規範十美的工夫」というように文字が書かれて来たとするのも無理があるようです。(第四段)

詩句を書く作者というのは文字の規範に振り回されているだけの客体ではありません。作者は書かねばならないという切実な何かをもっており、それを表現するために、やむをえず規範に従います。だが、規範にも従いつつも、絶えずその規範をも超えて行こうとする力を秘めた表現の主体です。この力が文字の姿を、例えば中国の殷の紀元前一四〇〇年頃に甲骨文の姿で歴史上に生まれた時とは全く異なった姿にまで変革してきました。(第五段)

なぜ、人間は文字、本当は言葉、を書くのかという観点がこの「美的工夫論」には脱け落ちていきます。「規範十美的工夫」によって書が生まれるという考えは一見もつともらしいが、実は素朴な理論にすぎません。(第六段)

この「美的工夫論」は、「書は文字の美術論」へと逸脱していくこととなります。文学は文字の意味内容に重心を置いた言語芸術だが、書は文字の視覚形象に重心を置いた視覚芸術だという説が、西洋美学者・井島勉によって唱えられました。書は「文字の美術」、さらに拡張して考えれば、書は「文字のデザイン」ということにもなります。はたして書は「文字の美的工夫」の延長線上に考えられる「文字の美術」「文字のデザイン」なのでしょうか。(第七段)

これに対して、中国文学者の吉川幸次郎は、「書を書く場合、点画(劃)の結合が言語として指示する方向を裏切つてはならない、わざと裏切る場合には裏切るだけの自信が自覚的になければならない」という表現で、「文字の美術」の説には書にとつて最も重大事であるべき言葉の問題がすっぽりと脱け落ちていることをはっきりと指摘しています。「書は文字の美術」という説は、なぜ書は言葉を書くのか、あるいはなぜ言葉を書いた場に書が生まれるのかという、言葉と書の関係の問題に入り込むことができず、書にとつて最大の

問題が不問にされているところが、致命的な欠陥です。(第八段)

書は文字の「美的工夫」＋「線の美」、もしくは「文字の美術」＋「線の美」というのが、現在の最も一般的な考えです。昭和に入ると書道家・鮫島看山(さゝいもんざん)という人が「書は文字と云ふ素材を借りて作者の主観を表現するところの線芸術である」と宣言しました。(第九段)

「線の美」という考えのどこが間違っているのでしょうか。それは文字を構成する「点と画(劃)」を「点と線」といつてしまったことです。例えば、「大」と書いた時の一点一画は、決して野放図な点と線ではありません。文字が誕生した時から歴史的に累積した書き方を踏まえた上での、「大」という文字を構成するための、否(いな)、文字の一部であるところの点と画にはかなりません。したがって、「大」の字を三本の線からなるといつても、実際には、第一画の横画は右上がりに書かれるのが基準であること、そこには、起筆と送筆と終筆という三つの単位をもって書かれること、第二画は「左はらい」といわれるような先端に行くに従って尖る形状をもつのに対して、第三画は「右はらい」と呼ばれる先端に三角形の力のためとはらいからなる形状を備えているものであることが前提とされています。「大」の字は左右対称であると大まかにいうことがありますが、その実は決して左右対称などではありえないことは共通に理解されています。(第十段)

文字を構成する「点と画」を見失い、「点と線」といつてしまった原因は、書は「文字を書く」と考えたところにあります。本当は「大」という文字を書くのではなくて、作者は何か切実な理由があって、「大」という言葉を書くのです。その「言葉であるところの文字」は点と画を積み重ねることから生まれてきます。(2)点と画は決して一般的な点や線ではなく、すでに言葉の一部である文字、否、言葉そのものをすでに微粒子的に含んでいる存在なのです。「文字を書く」という考えは、このとても大切な出来事を見逃し、したが

って「書は線の美」説も不十分な考えです。(第十一 段)

「書は文字の美的工夫」「書は文字の美術」「書は線の美」——いずれも、近代に入って「書とは何だろるか」という問いが浮かび上がり、何とかそれを言葉で説明しようとして、たくさんの人が考えぬいたところから生まれてきた説明です。しかし、これらの普通に考えられている説は、確かに書の一面を言い当ててはいますが、十分なものではありません。おおよそは当たっているとしても、書の美の核心部を射ぬいた言葉ではありません。それでは書はどのような芸術だと考えればよいのでしょうか。「書は言葉を書く」ところに生まれる表現です。書は文字の「美的工夫」とする説も「線の美」とする説も、ともに「文字」を出発点に措いたところが誤りです。

文字は言葉ですから、言葉を出発点に考えるべきです。しかもその言葉を生み出すのは書き言葉においては「書く」という行為ですから、「書く」というところ(現場)から考えるべきでもあります。(3)まさに「書」とは「書」、「書く」ことにほかなりません。書家とは、一般に考えられているような書道家の別名ではなく、文字通り、書く人、「物書き」の別名であると考ええる時、書というものの本当の姿に出会えるように思われます。(第十二 段)

「私が言葉を書く」という一つの構文は、「書く」という動詞が「私」という主語と「言葉」という目的語を生み出したと考えられます。動詞「書く」によって、「私」も「言葉」もともに生まれてきます。その点で、作者も作品世界も「書く」ことの中に折り畳まれてあるといえます。書は「書く芸術である」といってよいでしょう。(第十三 段)

(石川九楊「書に通ず」による)

〔注〕 恣意的に——自分の思うままに。

〔問1〕 (1) しかし、この「規範+美的工夫」という考えには落とし穴があります。とあるが、「この『規範+美的工夫』という考えに

は落とし穴があります」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 書は規範に沿うのではなくて現代的な考え方を踏まえて書くのが正しいという論は、作者の企てを見落としてしまいがちだということ。

イ 書は規範に従って書くことで美しさを表現するべきであるという論は、書の自然な書きぶりのよさを見逃してしまいがちだということ。

ウ 書は規範と個人的工夫で美が生まれるという論は、規範を超えようとする力が文字の姿を変えてきた点を見失っているということ。

エ 書は規範を超えて形を変えながら書くべきであるという論は、「書は美術ならず」という説の理解を妨げるおそれがあるということ。

〔問2〕 この文章の構成における第七段と第八段との関係を説明したものと最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 第七段で前段までの内容を集約する事例を挙げたのに対し、第八段ではその問題点を指摘する事例を示して自説の妥当性を強調している。

イ 第七段で前段までの内容を補足する事例を挙げたのに対し、第八段ではさらに具体的な事例を列挙して詳しく一つ一つを分析している。

ウ 第七段で前段までの内容を否定する事例を挙げたのに対し、第八段ではその根拠となる事例を紹介して問題解決までの手順を示している。

エ 第七段で前段までの内容を整理する古典的事例を挙げたのに対し、第八段では現代的事例を挙げて考え方の変化を明確にしている。

〔問3〕 (2) 点と画は決して一般的な点や線ではなく、すでに言葉の一部である文字、否、言葉そのものをすでに微粒子的に含んでいる存在なのです。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 文字における点と画は歴史的に累積した書き方を踏まえるだけでなく、だれもが理解できるように工夫して書いたものだとすること。

イ 文字の一点一画は単に言葉を構成するだけのものではなく、作者の切実な思いが幾重にも込められて成立しているものだとすること。

ウ 文字を構成する一点一画は単なる形状ではなく、一人一人が意識して書的美をきめ細かく表現しようとしたものだとすること。

エ 文字は規範に従って書かれているだけでなく、点と画によって作者が人知れず努力を積み重ねて書き表したものだということ。

〔問4〕 (3) まさに「書」とは「書」、「書く」ことにほかなりません。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 「書く芸術」は文字を書くという個人的な行為の結果として、芸術的な美であると認められることを忘れてはならないと考えたから。

イ 言葉を生み出すのは書き言葉においては「書く」という行為であり、書道家の作品には「書く芸術」の姿が具現化されていると考えたから。

ウ 「書く芸術」は、「書く」という目的があつてこそ成立するが、それは作品世界の中に溶け込んで見づらなものだと考えたから。

エ 「書」は、あくまでも人間の「書く」という行為があつてはじめてその人の個性や言葉が表現され、「書く芸術」になると考えたから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「言葉を書く」というテーマで各自が身近な体験を交えて意見を発表することとする。このとき、あなたが話す言葉を二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や、や「なども、それぞれ字数に数えよ。

〔5〕 次のA及びBは、それぞれ「論語」に関する対談と解説文である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

A 白川 公の場において「(1)孔子はなんでも知っている」と列席者が感心して＊子貢に言ったのを聞いて、孔子が自分の感想を述べる場面があります。

＊大宰、子貢に問うて曰はく、「夫子は＊聖者か。何ぞ其れ多能なる。」子貢曰はく、「固に天之を縦して將ど聖にして又多能なり。」子之を聞いて曰はく、「大宰は我を知らるか。吾が少きや賤し。故に鄙事に多能なり。君子は多ならんや。多ならず。」牢曰はく、「子云ふ、『吾試ひられず。故に藝あり。』と。」(子罕篇)

(現代語訳)

大宰の官の某が子貢に問うて、「あなたの先生は聖人です。いらつしやいますか。何と多くの藝能に通じていらつしやることでしょう。」と曰つたので、子貢は、「まことに天がこれを縦して知においても行いにおいてもその量を限ることがなく、ほとんど聖人であり、又多くの藝能に通じております。」と曰つて、大宰が多能をもって聖と心得ている

のに対して聖だから通じない所がないので、多能は聖の
*餘事よじであることをほのめかした。

孔子がこの大宰と子貢との問答を聞いて、「大宰がわし
を多能だというが、大宰はわしが多能なわけを知ってるだ
ろうか。わしは少い時世に用いられないで微賤ひせんの地位にい
た。それ故多くの微細な藝能を習い覚えたのである。わし
の多能なのは聖であるがためではない。成徳の君子の貴ぶ
所は多能であろうか。君子の貴ぶ所はもつと重大な所にあ
つて、決して多能に在るのではない。」と曰つて、自ら聖
の地位におらず、又多能をもつて聖とすることの誤りを示
された。後で弟子たちがこの話を記した時に、孔子の弟子
の宰が「先生は平日『わしは世に用いられなかつたから、
多くの藝能を習い覚えたのだ』といわれた」と曰つた。

(宇野哲人「論語新釈」による)

ここで孔子は「⁽²⁾君子は多ならんや。多ならざるなり」と念
を押すように言うております。「君子というものはむやみに物
知りであるわけではない。物知りが君子であるのではないぞ。
知識の問題ではないぞ」という意味ですが、これは孔子の言葉
がそのまま格言になつてゐる。いろいろ説明して納得させると
いうのではないんですな。もう全身全靈的に、その言葉の中に
全体がうずめこまれていて、その言葉を眺めていると孔子の考
えがすべて汲み取れるというぐらいの深みのある言葉です。こ
ういうのが孔子自身の言葉なんです。

そういうような形で『論語』を点検していくと、これは説明
的である、これは大分いろいろ飾りつけをやつてゐる、これは
詭弁的であるというように、すべて分別できる。孔子の言葉と
いうのは非常に真率と言いますか、素直であり、問題の要点を

非常に簡潔にあらわしています。しかも眺めていると、それが
いろいろに響いてくるような言葉で答えている。『論語』の中
には美文的にいろいろ飾つた言葉もありますけれど、そういう
ものを見てみると、これは本物か、あるいは形を変えているも
のか、そういうことが大体わかります。

渡部 ⁽¹⁾孔子が実際に言つた言葉がわかるわけですか。

白川 ええ、わかります。僕は『論語』を読むと孔子様とお話が
できる(笑)。

(3) 渡部 それは楽しいですね。なるほど、『論語』の中から孔子
の直接言つた言葉だけを読むという読み方があるんですね。そ
れによつて孔子の実像があらわになつてくるわけですね。

白川 そうです。この「君子は多ならんや。多ならざるなり」と
いうのは、僕は、孔子がちよつと嘆くような調子で言つておる
のだと思う。博学であるとか、多能であるとか言われるが、そ
んなことではないのだよ、と。そう思うのは、その直前に「吾
れ少きや賤し。故に鄙事に多能なり」という部分があるからで
す。孔子は「賤しいことに多能なのだよ」と言っているわけ。
そして「君子は多ならんや。多ならざるなり」と言つて、だめ
を押している。これだけ繰り返して言うという言い方、これは
答えの仕方として普通はやりません。ここにはちよつと孔子の
顔が出てゐるなというふうに思ひます。

渡部 ⁽⁴⁾いろいろなことができるのだけども、それは自分の本意
じゃないんだということですね。これはおもしろいですね。

白川 『論語』はおもしろい本ですよ。『論語』に書いてある孔子
の言葉にもせよ、弟子の言葉にもせよ、あの問答があれだけの
ものであるはずはない。私たちがこうしてしゃべつてゐるよう
に、二時間も三時間もしゃべりあげた挙げ句、結論として出し
た言葉が語録としてあそこに入つてゐるはずですよ。この対話の

背景には数時間にわたる討論があったと見なければならぬ。その結論を、言わば格言的に集約したものが『論語』です。だから『論語』を読むときには、その基礎になっている何時間にもわたる問題の領域というものをさかのぼって見ていかななくてはなりません。そして、その結論としての言葉を眺めてみる。(5) そうすると、その言葉の本当の内容が理解できるということになるわけです。

B

孔子は実にたくさんのことができた。社会の働き手がすることなら、農工のことも大体はやつてのけたのではないか。中島敦は、孔子の弟子子路を描いた小説『弟子』の中で、子路の誇る武芸においてさえ孔子の方が上だった、と書いている。ただ孔子においてはすべての能力が万遍なく発達していて、全体の中のみこまれているから、個々の能力は目立たないのだ、と中島敦はいう。

しかし、孔子に在るものは、決してそんな怪物めいた異常さではない。ただ最も常識的な完成に過ぎないのである。知情意の各々から肉体的の諸能力に至る迄、実に平凡に、しかし実に伸び伸びと発達した見事さである。一つ一つの能力の優秀さが全然目立たない程、過不足無く均衡のとれた豊かさ、子路にとつて初めて見る所のものであった。* 関連自在、些かの道学者臭も無いのに子路は驚く。此の人は苦勞人だなど直ぐに子路は直観した。可笑しいことに、子路の誇る武芸や * 膂力に於てさへ孔子の方が上なのである。ただ平生それを用ひないだけのことだ。

(中島 敦「弟子」による)

わたしは中島敦の描く子路が好きで、この小説は何度読んだか
しれないが、この子路の目から見た孔子像こそ、呉の大宰語が見

たものである。

—— 夫子は聖者か、何ぞそれ多能なる。

ここには、孔子の偉大さへの * 讚歎がまずあって、その偉大さ
がどういふものかわからないから、この聖と多能の対比で問うた
のである。いい質問であり、それがわかつたから孔子のあの答
があつたのだと思われる。質問がよくなければ、いい答は出てこ
ない。いい答はいい質問にひびくようにして出てくるのだ。

(中野孝次「中野孝次の論語」による)

〔注〕

子貢——孔子の弟子。

大宰——役職名で、Bの文章で「呉の大宰語」と表された人
物。

聖者——知徳に非常に優れ、尊敬される理想的な人。

餘事——余力ですること。

関連自在——物事にこだわらず、思いのままの様子。

膂力——筋肉の力。腕力。

讚歎——深く感心してほめること。

〔問1〕 孔子はなんでも知つている とあるが、この言葉に相当
する一文を、Aの対談中に引用されている論語の書き下し文の中
からそのまま抜き出して書け。

〔問2〕 (2) 君子は多ならんや。多ならざるなり とあるが、Bの文
章中で中野孝次が、呉の大宰の言葉と孔子のこの言葉との関係に
ついて述べている箇所がある。その関係について次の□内の
ようにまとめるとき、()に当てはまる最も適切な言葉をBの文
章中からそのまま抜き出して書け。

孔子の味わい深いこの言葉は、呉の大宰の()し
て出てきた答えである。

〔問3〕 (3) 渡部 の発言は、それまでの白川さんの発言をどのよう

に受け止め、どのような意図で発言したのかを説明したものと
して最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 論語には美しい言葉に直して品格の高い文章にしたものが多
いという白川さんの分析に共感し、さらに詳しい論理的な説明
を求めている。

イ 論語を読むと孔子自身の言葉かどうか分かるという白川さん
の解釈に興味を抱き、本当の孔子に迫る内容へ話を展開させよ
うとしている。

ウ 論語をとおして孔子と会話できるという白川さんの発言を不
思議に思い、真実かどうかを確かめようと具体的な事例を知ろ
うとしている。

エ 論語の議論には内容をこじつけたものもあるという白川さん
の意見に賛同し、孔子についての自分の感想を述べるきつかけ
を作っている。

〔問4〕 (4) いろいろなことができるのだけでも、それは自分の本意
じゃないんだということですね。とあるが、Bの文章中に引用さ
れている中島敦の小説『弟子』の中にも、孔子が「いろいろなか
とができるのだけれども、それは自分の本意じゃない」と思っ
ているのに弟子の子路が気付いたことを述べた一文がある。その一
文をそのまま抜き出して書け。

〔問5〕 (5) そうすると、その言葉の本当の内容が理解できるという
ことになるわけです。とあるが、白川さんがこのように述べたわ
けとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 論語の内容を把握するには、一つ一つの言葉に正確な解釈が
必要なので、漢文の基礎的な力を身に付けることが大切だと考
えたから。

イ 論語の隠れたおもしろさは、長時間の会話が詳細に記録され
ているので、初めの話題から結論まで一読でたどれる点にある

と考えたから。

ウ 論語を読む喜びは、多くの時間を費やした討論の結果の集約
であるのを念頭に読むことで、孔子の素顔を感じることでと考
えたから。

エ 論語の言葉に込めた孔子の本意を理解するには、その言葉を
語るに至った、長い年月の歴史的な背景を学ぶことが必要だと
考えたから。

(注) この解答用紙は編集上の都合により、
 実物を約65%に縮小してあります。
 153%の拡大コピーによりほぼ原寸大で
 使用する事ができます。

1	いて			れる	
	(1) 磨いて	(2) 栽培	(3) 循環	(4) 揺れる	(5) 織練

2	げる			つた	
	(1) ナげる	(2) タンシヨウ	(3) ザイゲン	(4) フった	(5) アツカン

3	(問1)	(問2)	(問3)	(問4)	
	(問5)				

4	(問1)	(問2)	(問3)	(問4)	
	(問5)				

5	(問1)			
	(問2)			
	(問3)			
	(問4)			
	(問5)			

配点

① (計10点)					② (計10点)					③ (計25点)					④ (計30点)					⑤ (計25点)				
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	問1	問2	問3	問4	問5	問1	問2	問3	問4	問5	問1	問2	問3	問4	問5
2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	10点	5点	5点	5点	5点	5点

応後の質量は増加する($2\text{Cu} + \text{O}_2 \rightarrow 2\text{CuO}$)。

⑥〔運動とエネルギー〕

〔問1〕〈力のつり合い〉つり合っている2力とは、1つの物体にはたらく力で、大きさが等しく、一直線上にはたらし、向きが反対の力のことである。なお、テープが台車Aに加える力と、テープが台車Aから受ける力は、向きが反対で、大きさは等しいが、2つの物体それぞれにはたらく力なので、つり合っている2力ではない。

〔問2〕〈物体の運動〉台車Bが車止めDに当たるまでは、台車Bに斜面方向の力がはたらき続けるから、速さはだんだん速くなる。よって、糸でつながっている台車Aにも運動の向きに力がはたらき続け、速さはだんだん速くなる。また、台車Bが車止めDに当たると、台車Bは停止し、台車Aを引く力はなくなる。このとき、台車Aはそのままの速さで等速直線運動をする。

〔問3〕〈エネルギー〉運動エネルギーは運動している物体がもつエネルギー、位置エネルギーは高い位置にある物体がもつエネルギー、そして力学的エネルギーは運動エネルギーと位置エネルギーの和である。台車Bが車止めDに当たるまでは、台車Aの速さはだんだん速くなるから運動エネルギーは増加する。しかし、このとき高さは変わらないから位置エネルギーは一定である。このとき、力学的エネルギーは増加する。その直後から台車Aが車止めCに当たるまでは、台車Aは等速直線運動を続けるから運動エネルギーは一定で、高さも変わらないから位置エネルギーも一定である。よって、力学的エネルギーも一定である。

国語

解答

- 一 (1) みが (2) さいばい
(3) じゅんかん (4) ゆ (5) たんれん

- 二 (1) 投 (2) 探勝 (3) 財源 (4) 降
(5) 圧巻

- 三 〔問1〕 エ 〔問2〕 イ

- 〔問3〕 ア 〔問4〕 エ

- 〔問5〕 (例)気づかないうちに自分を見守り、支えてくれているのが家族だと改めて実感した思い。

(39字)

- 四 〔問1〕 ウ 〔問2〕 ア

- 〔問3〕 イ 〔問4〕 エ

- 〔問5〕 (省略)

- 五 〔問1〕 何ぞ其れ多能なる。

- 〔問2〕 いい質問にひびくように

- 〔問3〕 イ

- 〔問4〕 此の人は苦勞人だなど直ぐに子路は直観した。

- 〔問5〕 ウ

一 〔漢字〕

- (1)音読みは「研磨」などの「マ」。 (2)野菜や果樹などの植物を植えて育てること。 (3)一回りして元のところに戻ることを繰り返すこと。 (4)音読みは「動揺」などの「ヨウ」。 (5)訓練を積んで、心身をきたえたり技能を磨いたりすること。

二 〔漢字〕

- (1)音読みは「投球」などの「トウ」。 (2)景色のよい土地を訪ねて、風景を見て歩くこと。 (3)事業などをするのに必要な金やその出所。 (4)音読みは、「降雪」などの「コウ」。 (5)書物や芸術作品などの中で一番優れているところ。

三 〔小説の読解〕 出典；光野桃『背中』。

- 〔問1〕〈表現〉住み慣れた土地を離れて、見知らぬ所に住むのはなんとも「心細」く、「わたし」は「なじみのない」風景に、不安を感じている。
〔問2〕〈表現〉「わたし」は「ギュッとハンドルを握り締め、グイと前を見つめ」て、引き締まった気持ちで「ペダルを踏み込ん」でいる。父は、荷台を支えながら「ざざっと～土を蹴」り、「わたし」の背を勢いよく押す。自転車の練習をする「わたし」と、補助する父のすばやい動きとが、生き生きと表現されている。

〔問3〕〈心情〉怖さを我慢して無我夢中でペダルを踏んだ「わたし」は、本当に一人で自転車に乗れたのかわからず、思わず父に確かめた。父の優しい言葉と笑顔から、「わたし」は一人で乗れたことを改めて実感し、喜びがこみあげた。

〔問4〕〈文章内容〉母は、自転車用に自分で作った服を着て、「呼吸を整えてぐっとペダルを踏み込んだ」。父は、母が自転車に乗るのを待って発進した。「わたし」は、母が自転車に乗れるようになったことを知って、二人で並んで自転車で通勤する父母の姿を見送った。

〔問5〕〈文章内容〉「わたし」は、自分も仕事が忙しく、両親を思いやることも少なくなり「家族に背中しか見せなくなっていた」のである。一方、母は、新しい仕事を始めて時々考え込む父の、「背中をただ見守ることで精一杯」だった。しかし、家族がそれぞれ一人で生きているようなつもりでいても、実は見えない「家族の手」によって背後から支えられ、見守られていたことに「わたし」は気づいた。

四 〔論説文の読解—芸術・文学・言語学的分野—芸術〕出典：石川九楊『書に通ず』。

〈本文の概要〉一般的に、書は美術であると理解されている。文字の歴史的な規範に沿いながら、そこに作者なりの美的工夫をしのばせることで、書の美が生まれるというのが、現在の最も一般的な考え方である。しかし、作者は規範に従って書きながらも、その規範をも超えて書かねばならないという切実な思いがあるからこそ、書に書くのである。美的工夫論には、人間はなぜ「言葉」を書くのか、という言葉と書の関係が抜け落ちている。書の一点一画には、言葉そのものが、すでに萌芽的に含まれている。書は、「言葉を書く」ことから生まれる表現である。「書く」ことによって、「私」も「言葉」も生まれる。書は、「言葉を書く」ことで、作者と作品世界を表現する「書く芸術」なのである。

〔問1〕〈文章内容〉歴史的な規範に美的工夫を加えることで美が生まれる、という書の考え方には、規範に従いながらも、その規範を超えていこうとする書き手のもつ内面的な力が考慮されていない。

〔問2〕〈段落関係〉「規範+美的工夫」論から、書は「文字の美術」「文字のデザイン」であるという考え方が生まれるが、はたしてそうだろ

うか(第七段)。書が「文字の美術」であるという説には、「なぜ言葉を書くのか」という、最大の問題が見過ごされている。書は、言葉との関係が根本なのである(第八段)。

〔問3〕〈文章内容〉書の書き手は、単に点と線からできた「文字を書く」のではない。何らかの切実な理由があって、一点一画に作者の思いの込められた「言葉を書く」のである。

〔問4〕〈文章内容〉書は、「言葉を書く」ことを出発点に考えるべきである。そして、「言葉」も、「言葉」を書く「私」も、「書く」という行為があってはじめて、生み出される。「書く」ことによって、作者と作品世界が表現されるという点で、書は「書く芸術」なのである。

〔問5〕〈作文〉「言葉を書く」とは、単なる記号のような「文字」を書き連ねることではない。それは、書き手のやむにやまれぬ、切実な思いのこもった「言葉」を書くことなのである。

五 〔説明文の読解—芸術・文学・言語学的分野—文学〕出典：白川静、渡部昇一『知の愉しみ 知の力』、中野孝次『中野孝次の論語』。

〔問1〕〈漢文の内容理解〉大宰は、孔子の弟子である子貢に、あなたの先生は聖人なのではないか、「何と多くの芸能に通じていらっしゃることでしょう」と言った。

〔問2〕〈漢文の内容理解〉孔子は、大宰の質問に対して「君子は～多ならず」と「深みのある言葉」で答えた。孔子の味わい深いこの言葉は、大宰の質問がよかったからこそ、「いい質問にひびくように」出てきた答えであった。

〔問3〕〈文章内容〉白川は、『論語』を読むと「孔子が実際に言った言葉がわかる」ので、孔子と話ができる、という。渡部は、白川の発言に興味をもち、「孔子の実像」に迫る話を白川から引き出そうとする。

〔問4〕〈文章内容〉孔子は、若いころ世に用いられなかったからこそ、逆に細々とした多くの芸能を習い覚えたのである。

〔問5〕〈文章内容〉『論語』に書かれているのは対話の結論であって、その背後には、孔子と弟子との間に、何時間にもわたる討論があったはずである。その過程を念頭に置いて読んだとき、孔子の言葉の本当の意味を、よりよく感じ取ることができる。